～氷渡り～ヒワタリ

shooting speed

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～氷渡り～ヒワタリ

【Ｎコード】
Ｎ８８８１Ｙ

【作者名】
ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｓｐｅｅｄ

【あらすじ】
氷の鏡に触れ、『鏡の中の世界』にとばされた氷雨は、精霊の力と魔法を使い、邪悪な意思に立ち向かう。オリジナル。処女作、ファンタジー、駄作。非常に見苦しい作品となっております。了承ください。読んだいただけるとうれしいです。

プロローグ　星の精の紡ぎ唱（前書き）

オリジナル。処女作、ファンタジー、駄作。非常に見苦しい作品となっております。了承ください。読んだいただけるとうれしいです。

プロローグ　星の精の紡ぎ唱

プロローグ～星の精の紡ぎ歌～

いつか見たあの世界は何処だったんだろう
いつか見たもう一人の私は誰だろう
わかっていることはひとつだけ。
あそこは、ここじゃない
あれは、私じゃない！
私は忘れない　いつまでも
あの冷たい目で見つめられたこと
あんなふうに笑われたことを私は忘れない

夢の中、もう一人の私がいる　その私は今の私より行動力があって、優しい感じ
いつか私も　あんなふうになれる日が来るのかな
いつか、あんなふうになりたいな

よく晴れた日の夜、私は星を見上げる
星を結んで描く私
あの私はいつも微笑んでくれている
遠い空から見守ってくれている。

鏡に映る私は、私のもうひとつの姿。
まったく同じに見えて、左右反対に映る私
この鏡を越えていくと、どんな私に会えるんだろう？

そして今、また別の世界に、私はいる。
此処は何処だろう

ここには、どんな私がいるんだろう？

プロローグ　星の精の紡ぎ唱（後書き）

今回は出来がいまいちです・・・いずれ直します。
ちなみにこれからも『～の紡ぎ唱』というタイトルでその章のあらすじのようなものを書いていきますので、よろしくお願いいたします。

第一話　渡りの鏡

第一話～渡りの鏡～

闇の中、私はひとり歩く。どうして歩いているんだろう？何処へ向かっているんだろう？わからない。それでもひたすら歩く。

どれほど歩いても闇は晴れず、行く先に何も見えない。でも立ち止まる気にはならない。

そこで私の目に、一筋の光が映る。

また特に理由もなく走り出したくなって、私は駆け出す。

ちょうど走りつかれたところで、私は上を見上げる。

そこには光り輝く鏡が浮いていて、そこに上るための階段があった。

階段を一段飛ばしで駆け上がる。すぐに目の前に鏡が見えてくる。

私は鏡に手を触れる。それは氷でできているように、ひんやりと冷たい。

鏡には私の姿が映っている。

と、そこで気づいた。私の手は鏡に張り付いて動かなくなっている。

あわてて引き剥がそうとしたけど、ちっとも離れない。

そのうちに手が凍り始めた。

それはだんだんと体のほうにも広がってきて、首まで迫ってきた。でも不思議と怖くはない。

顔が氷で覆われる。息苦しくないのが不思議だ。

そして体が完全に凍りつき、そしてたぶん私の体が粉々に砕け散るころには、

私の意識はこの世界を離れていた。

☆

此処は何処だろう。
冷たい冬の空気が私の肌を刺す。なぜだか私は真冬なのに薄手のワンピース。（ちなみに色は私の好みで水色）寒いわけだ。

さっきの言葉、それは私がここに来て最初に頭に浮かんだことだ。いまだ答えは出ずにいる。
記憶もあいまいではっきりしない。
街中を一人歩きながら私は考え続ける。
周りに広がる景色、店の配置、すべてをなんとなくだが私は覚えている。しかし此処は同じ位置にありながら、すべての建物は木製、飾りも素っ気無い布だけ。
ふと心配になって、私は駆け出す。私の家へと。
すると、信じられない光景が飛び込んできた。
私の家は普通に立っていたし、外見も大差ない。
でもそこには、もう一人私がいた。
あれは誰だろう？そう思っていると、その私が急にこっちを向いて、笑いかけてきた。
でも、目が笑っていない。冷たい笑い。
私は急いで振り向き、家と反対の方向へ駆け出した。
怖い…！怖いよ…！
襲い来る得体の知れない恐怖感にさいなまれながら。

☆

ハァッ…！ハァッハァッハァ……
家の近くの山にたどり着いて、ようやく私は足を止める。
あんなふうに笑われたことは初めてだ。
それに、此処には私が帰るはずの場所がない。もはやここは私のいる世界ではない。
そう思ったと段、なんだかすべてのものが私を拒絶しているように思えていて、私は地面にへたり込んだ。

これからは、一体何を頼りにして生きていけばいいの？
涙が溢れ出す。
しばらくそのままうずくまって一人で泣いていると、花の香りが漂ってきた。
香りが流れてくる方を向くと、一人の少女が近づいてくるのが見えた。年は私より一つか二つ下だろうか。
（あなたは・・・誰？）
聞いたつもりだったが口が動かず、そのまま私の意識は深い闇のそこへ沈んで言った。

☆

『起きて…朝よ…。』
誰かが私の体をゆすっている。目を開けると、そこには昨日見た例の少女が立っていた。あの時はそこまで見る余裕がなかったのだか、目の前の少女も緑色のティーシャツにスカート。薄着である。
（人のことをいえないが。）寒くないのだろうか。
「う…ん、…あなたは…？」
まだ鈍いままの意識と、うまく動かない口でそれでも何とか聞くと、少女は微笑みながら答えてくれる。
『私は木霊（コダマ）。…お腹すいているんじゃない？よかったらこれ食べて。』
そういって少女は木の実を差し出してくれる。私はゆっくり体を起こし、少女が差し出してくれたそれを受け取る。
確かにお腹がすいているみたいだ。空を見上げると太陽はだいぶ上っていた。大体八時くらいだろうか。そんなことをボーっとした頭で考えながら、私は木の実を一口かじる。
とたんに、甘みが口の中いっぱいに広がる。しかし後味はさっぱりした感じだ。私の頭の中のボーっとした感じが引いていくのが自分でわかった。
「…美味しい…！」
思わず言葉が口から漏れる。すると少し心配そうに見守っていた

少女の顔がパッと明るくなった。
『口にあったみたいでよかった。これ、私のお気に入りなの。よかったらもうひとつ食べて。』
少女が二個目を差し出す。受け取って食べていると、草が足に触って、それが引き金になって昨日のことが思い出された。
『…どうしたの？』
少女がこちらの顔を心配そうな顔で覗き込む。どうやら顔に出ていたらしい。
「ううん…なんでもない。」
いつのまにかあふれ始めた涙をぬぐい、私は返す。ただその声が震えているのが自分でわかった。『…何かあったみたいね。』
あっさり見破り、少女は聞いてくる。
『別に話したくないならいいけど…少しくらい誰かに相談してみたら？そのほうが気が軽くなるよ、きっと。』
少女がやさしく声をかけてくれる。その思いやりにまた別の涙が溢れ出しそうになるが、必死でこらえつつ、
「うん…ありがとう。…実はね…」
そうして私は昨晩の出来事を少女…木霊に話し始めた。

☆

『…そんなことがあったの。』
ひとしきり話を聞くと、木霊は言う。
「うん…。だからもう、私、どうしたらいいかわからなくて…。」
しばらく沈黙が続く。と、そこで木霊が唐突に口を開く。
『あのね、信じないかもしれないけど、私、植物の精霊なの。』
精霊？
理解するのに三秒。
その後立ち上がって木の周りを三週回ってワンとほえる。
そのあと息を思いっきり吸い込んで叫ぶ。
「えええええええええええええっ！！！！！！」
…叫んだ後でものすごい抜けた声を出してしまったと後悔する。

あわてて木霊のほうを向くと、彼女は下を向いていた。
どうした！と聞こうとして私は、木霊の肩が小刻みに震えているのに気がついた。
『ふ…ふふふふふ…』
声が漏れてくる。そしてとうとう木霊はこらえきれなくなったように、
『あはははははははははっ！』
と声を上げて笑い出す。
「ちょ、木霊？」
『あはははっ…ハァハァ…ごめんごめん。いや、でもすごいもの見ちゃったわ。…いやあ、面白かった。今迄で一番面白いかもよ、あなたの反応。』
「っ／／／！」
顔が赤くなるのが自分でわかった。
「そ、そんなことより、なにがいいたいの？」
声が上ずっている。それを聞いて木霊はまた少し笑って、それから続けた。
『私も似たような経験があるの。…前に迷い込んできた子にいろいろ…えっと、例えばね、』
木霊はそういうと手をさっと振る。するとその手に一枚の花びらが乗っていた。色や形からみるに、どうやら桜らしい。
『こうやって、何もないとこから花を出したりね。…でも喜ばせるつもりが、かえって怖がられちゃったみたいでね。逃げられちゃった。「化け物」って言われたわ。…その日から自分の力を意識するようになった。きっと誰も私のことはわかってくれない…』「そんなことないよっ！！」
私は叫ぶ。きっと今の声にはとても大きい拒絶の念がこもっていただろう。
私は続ける。
「だって、木霊が良かれと思ってやったことでしょ？だったらそ

の行動は決して化け物なんかがやることじゃない！」
そこで私は口調を緩める。
「だから、木霊が気にすることなんて何もないよ。…私もいるし！」
そして私は木霊に笑いかける。明るく笑えたか自信はないけど、木霊は笑ってくれた。
『ありがとう…優しいね。…そうだ、あなたの名前を考えてなかった！』
考えて？聞いて、の間違いじゃないのか？と思って聞いてみると木霊は当たり前、とでも言うように教えてくれた。
『ええ、普通ならね。…でもここにはすでにあなたがいる。どういういきさつかは知らないけど、家族はあっちの味方につくでしょうし。だから、あなたには別の名前が必要なの。あ、候補はあるわよ。』
木霊は一拍間をおいて続ける。
『氷雨…はどう？あなたのきれいな蒼い目にぴったりだと思うけど。』
「氷雨…」
繰り返してみる。…うん、悪くない。響きもいい。
「うん、ありがとう。…気に入った。そう名乗ることにするわ。」
ありがとう、木霊。私は心の中で繰り返す。
「それで、私はどうすればいいの？ずっとこの山にいるわけにもいかないし、あの私が誰かも確かめないといけないし。」
そう聞くと、木霊も神妙な顔になった。
『そうね、それを考えないと。…でも、まだ私とあなたが持っている情報をあわせても解決には至らない。…だから、あなたはこの世界のことをもっと知るべきだと思うわ。…そう、しばらくこの世界を旅してみるのはどう？』
木霊が提案する。その後付け加えて、
『私も本当は口で伝えたりしたい。けど、きっと私が精霊だって

事をいってもなんとなくしか理解できないのと同じで、今までとかけ離れたことを知るのには、とても長い時間がかかると思う。だから、』

そこで木霊は遠くを見る目月になった。

『この世界を知るために、旅をするべきだと思う。』

そういってこちらを向く。今もいつもみたいに笑顔を浮かべているが、それが少しかげっているように見えた。目に少し涙が浮かんでいるような気がする。そんな木霊を見て、らしくない、と思った。

そこで私は、とりあえずものも言わず木霊の背中をひっぱたいた。

『ぶっ！！』

当然木霊はびっくりした顔で、しかもにらんでくる。

『な、なにするのよっ！痛いじゃない！』

拗ねている…のだろうか。その顔を見て、私は吹き出した。

「あはははっ！！」

『な、なにがおもしろいの？』

木霊があせって聞いてくる。それにすぐには答えず、私は言う。

「いやぁ…木霊らしくないなと思って。だってさ、あれだけ元気な木霊が沈んでるんだもん。似合わないのは、当然だと思うわ。」

そこで言葉を切ると、木霊は目にたまった涙を拭き、

『うん…ありがとう。今まで優しくしてくれた人間って、氷雨だけだから、つい感傷的になっちゃって。』

そう面と向かって礼？ともかく持ち上げられると恥ずかしい。それを隠して私は続ける。

「大丈夫だよ。…これが最後の別れってわけでもないし。」

木霊がまた泣きそうな顔になる。…がすぐにその顔をぶんぶんと振って、うなずく。

『そうだね。…ありがとう。』

木霊がこっちを向く。その顔にはもはや悲しみはなかった。

その時、突然空が暗くなった。

さっきまで青空が広がっていたのに、だ。
そして雨が降り出した。
『何なの、これ・・・・・・・』
木霊がつぶやく。木霊なら何か知っているかと思ったのだが、それも外れたようだ。
私は雨宿りをする場所を探すのを忘れ、空を見上げていた。
寒い…でもこの薄ら寒さはただ冬だからという以上のものを感じる。悪意、だ。怨みのような感情を、私はこの雨に感じていた。
そしてその悪意は高まり、ついに爆発した。その恨みは雷の形をとり、私たちのいる山に落下した。
轟音が響き、閃光がほとばしる。そして山頂から、巨大な岩が落下してきた。
『いけない！！』
木霊が叫んだが、その時にはもうすでに手遅れになっていた。
偶然にもこの山は標高が低く、斜面が急で、もうその岩石は目前に迫っていた。もはやその進む道は軌道から見てこちらに確定している。
とっさに腕で顔を庇う。突き放すように伸ばした右手は、むなしく空を切るだけだった。
私はただ、ぎゅっと目をつぶり、衝撃に備えた。

ところが、いつまでも衝撃はやってこない。
そもそも右手が空を切るというのがおかしい。あの岩石のスピードからして、手が岩に当たらないことはありえないのだ。
恐る恐る目を開ける。そして驚くべき光景を目にした。
さっきまで動いていたはずの岩石がとまっている。
それも、氷付けになって。
隣を見ると、木霊も呆然としている。
その私たちの目の前で、ピシッという小さな音を立て、氷にひびが入った。

それをきっかけとしてヒビは全体に広がっていった。
『凍結崩壊…。』
木霊がつぶやく。
それをいうのと同じタイミングで、岩石は粉々に砕け散った。
しばらく氷雨たちは呆然としていた。…がふとわれに返り、先程岩を砕いたらしい自分の右腕を見つめた。
その腕には薄く、≪三≫の記号が刻まれていた。

☆

あれから。
氷雨は山を出て、街中を歩いていた。
木霊は調べ物があるといって森の中に帰っていった。
あわただしい別れだと氷雨は思ったが、とりあえず別れを述べてここまできたのだった。
氷雨の服装は大幅に変わっていた。
何でも木霊が言うに、『この世界に科学繊維は存在していないから、外の格好に合わせた方がいいわ。』ということらしい。そういうわけで木霊がくれた絹糸の服を着て深い青色に白い縁取りのフードつきマントを羽織っていた。そして手には杖。
これは旅立とうとするときに突然一本松の上から降ってきたものだ。木でできたそれが頭の上に落ちてきたので、ものすごく痛かった。…じゃなくて、これが木霊にもわからない代物らしく、まあ、とりあえず持っておくといいといわれてひとまず持っていくことにした、というわけだ。
そういうわけで（なの？）北へ向かうことにした。木霊は少しばかりの現金をくれたので、しばらくはそれですごすつもりだった。
ひとまず近くの露店で地図を購入し、北のほうへと歩く。
と、そこで、あの私が近くに見えた。彼女は今度は笑いかけてはこず、こちらをにらみつけてきた。しかし私は今度は目線をそらさない。すると今度は彼女のほうから身を翻す。そして去り際にもう一度振り返る。冷たくあざけるような目で。

それをもろともせず、私は北へ旅立った。

この旅に暗い雲が立ち込めていることを、氷雨はまだ知りもしなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8881y/

～氷渡り～ヒワタリ

2011年11月26日19時56分発行